

令和7年度 第1回学校運営協議会記録

1 日時

令和7年5月27日（火） 15:00～16:30

2 場所

本校会議室

3 参加者

（1）学校運営協議会委員 8名

A委員（学識経験者）

B委員（教育関係有識者）

C委員（福祉関係者）

D委員（PTA 関係者）→御欠席

E委員（企業関係者）

F委員（地域関係者）

G委員（福祉関係者）

H委員（行政関係者）

校 長（本校職員）

（2）本校職員 9名（委員の校長も含む）

校長 副校長（小・中・高）、事務長、総括教務主任、学部主事（小・中・高）

4 内容

（1）開会のことば

（2）校長あいさつ

皆様、こんにちは。本日は、本校の学校運営協議会にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

人事異動等により、前任の方から引き継いでいただき今回初めてご出席される方や、継続して引き受けていただいた方を交えて、今年度第1回目の学校運営協議会でございます。

本校の学校運営協議会のこの体制がスタートしてから3年目を迎えることになっております。

当初の2年間については、地域と学校に関する基本的な考え方の整理や、校内の体制づくりに費やした期間だったように感じております。この間、本校の学校経営に対するご理解のもと、様々なお考えやご意見等いただきまし

て進めてくることができました。改めて感謝申し上げます。

本日ですが、令和7年度の学校経営計画並びに本校の地域連携に関する取り組みを中心にお話をさせていただきます。

皆様からご意見等いただきながら、今後に生かしてまいりたいと思いますので、本日はよろしく願いいたします。

(3) 委員・職員紹介

自己紹介

(4) 会長・副会長の選出

会 長…A委員

副会長…G委員

会長挨拶（A委員）

今年度もどうかよろしくお願いいたします。

今年から委員になられた方もいらっしゃるので、最初に学校運営協議会がどういうものかについて確認します。1つ目は、学校の経営方針等の承認です。2つ目は、様々学校に関して意見を述べさせていただくこと。3つ目は所定の手続きを経て教員人事について、何かあれば意見を申し述べさせていただくという、この3つが大きな役割です。

ただ、一番大事な役割は、地域や学校など様々な関係の人間が一緒になって、子どもたちのためにより学校作りをしていくということだと私は考えております。この後、校長先生の方から、経営計画や今後の様々な学校としての取り組みについてご説明をいただきます。ぜひこの運営協議会の方で方針等について共通理解をさせていただいた上で、それぞれの立場からより良いものにしていくようなお話ができればよいなと考えておりますので、皆さんもどうぞよろしくお願いいたします。

副会長（G委員）

昨年度から引き続き副会長をさせていただきます。会長さんのお話にあったように、なんとかよい学校運営に繋がるような意見やお話があればよいなと考えております。よろしくお願いいたします。

(5) 協議

ア 令和7年度学校経営計画について

校長：

令和6年度（令和7年）2月17日に行われた第3回学校運営協議会において、新年度（＝令和7年度）の学校経営に向けた基本方針をご承認いただいた。このことを受け、令和7年度の学校経営計画を作成し、4月から新年度の学校がスタートしている。

大きくローマ数字を振った項目Ⅰ～Ⅵのうち、Ⅰ～Ⅳは昨年度と特に変更はない。これまで通り続けていく。Ⅴの学校経営方針のところに6項目記載したうちの最後の「6」に加筆したところがある。「6」の前半に「特別支援教育の専門性を活かし～」とあるが、その続きに「児童生徒の発達に即した教育を行うとともに、必要に応じて～」という文言を加筆している。これについては、特別支援教育の専門性を土台に日々教育に従事していることに加え、子どもたちの基本的人権を尊重する意識や態度をもってはじめてめて形となるものであるという考えと、専門性をより発展的に生かしていく意味において、必要に応じて柔軟性をもって関係機関と連携をしていくという意味合いのもとに加筆をしている。子どもたちの基本的人権の尊重については、昨年度から正式に取り組みが始まった「岩手モデル」にも関わっている。学校種の違いはあるが、不適切な指導の根絶に向けた教育的取り組みを忘れないようにしていきたいと願うものである。

続いて、「Ⅵ」の「学校目標達成に向けた経営の重点」については、今年度の学校経営を具体的に進めていくにあたってポイントとしたいものを載せている。

「1」については昨年度同様の文言である。学習指導要領を基盤とする教育実践はもちろんだが、3観点を踏まえた適切な評価を進めていくことを基本として、将来の自立と社会参加につながる生きる力の育成を、小・中・高の3学部が系統性をもって取り組んでいくことを目指していきたいと考えている。同時に、その先にある適切な進路につながっていくことを望むものでもある。

「2」についても文言の変更はない。岩手県教育委員会が掲げている復興教育に基づく教育活動を継続して取り組んでいきたいと考えている。復興教育のキーワードである「いきる」「かかわる」「そなえる」に繋がる様々な教育活動を、本校では「岩手版キャリア教育」と捉え、子どもたちの生活する力の質を高めていくことに取り組んでいきたいと考えている。

「3」については、(3)の一部を修正している。これまでは「スクールカウンセラーや医療機関との連携」という表記だったが、状況に応じたより幅の広い連携を考えていきたいことから、「関係各所や機関との連携」と変更し、持ち合わせている情報の温度差が生じないようにする意味で、「連携を通して情報を共有」という文言にしている。なお、いじめについては、学校として組織的に機能していくことを基本とし、本校ではずっと取り組んでいることだが「いじめ

アンケート」、「学校生活アンケート」を継続し、分析をしっかりと行っていくことが大切だと考えている。安心、安全に繋がる教育環境の整備については、引き続き取り組んでいく。

「4」については、先ほど述べた復興教育のキーワードのうち、「かかわる」をより具体的に取り組み、開かれた学校づくりにつなげていけるよう、ここでは(1)～(6)に示している。(3)については、これまで述べてきた地域の捉え方を踏まえ、令和5年度、6年度に取り組んできた言葉を使い、「身近な地域」＝「ローカルエリア」を意識した題材を活用し、3学部が連携した地域学習を展開し、地域理解の意識を高めることに繋げていきたいと考え、「地域理解の意識を高めながら」を加筆した。この地域連携については、この後で説明する。また、(4)の昨年度から取り組んでいる情報端末を活用した積極的な情報発信と進路指導の充実などは、新年度も継続して取り組んでいく。(6)の学校運営協議会、このコミュニティスクールについては、本校の地域学習の発信を受け止めてもらいながら、学校経営のサポーター的役割を担っていただき、ご意見やご助言を求めていると考えている。

「5」については大きく変更はない。今年度は、県が主催するサポーター養成研修講座の担当校になっている。特別支援教育のセンター機能に関わる取り組みとして、本校に役割が回ってきている。(3)に関わっては、今年度もしっかりと校内体制を構築し、様々なケースに対応していきたいと考えている。必要な支援体制の第一歩として、関わっている関係者同士がケースをいかに情報共有し、方向性を同じにして進めていくかが大切だ。様々なケースの積み重ねをもとに、対応スキルの向上が図られていくものと考えている。

最後の「6」については、学校組織に所属する一員としての自覚と基本的業務の維持を基本に考えて設定している。職員数もさらに増え、今年度は様々な職種を加えて全部で116名（在籍は118名）の教職員が働く現場となっている。複雑な組織形態を維持していくためにも、基本である報告、連絡、相談の流れを再確認する必要があると感じ、(2)に「報告、連絡、相談を基本とする～」という文言を加筆した。加えて、昨年度から不適切な指導の根絶に向けた「岩手モデル」の取り組みが始まっていることを受け、改めて児童生徒の基本的な人権を意識して、障がい特性に応じた適切な対応の必要性ということを考え、(3)の一文を新規に加えた。(4)は、目まぐるしく変化する情報社会への対応意識を持ちながら業務をする必要性もあることから、「情報端末を活用した業務の改善や効率化に意識して取り組む」という文言を加筆している。

以上、令和7年度の学校経営計画についての説明を終わるが、専門性を維持して、チームティーチングを基本とするアセスメントを土台にし、子どもたちと信頼関係を作り教育活動を展開していくということを大切にしていく。加え

て、教職員一人一人が与えられた職責を果たし、丁寧に積み重ねながら、保護者の方々、地域の方々から信頼される学校づくりにつなげていきたいと考えている。

続いて、「令和7年度学校経営計画にかかわる達成指標について」。岩手県の県民計画において、岩手県教育委員会が進める方策として、学校経営計画で設定した、先ほど申し上げた重点目標の達成に向け、指標を立て数値化して報告することとされている。本校でもそれに基づいて取り組んでいるところだが、昨年度同様、この達成指標を数値としてお示ししている。今年も引き続き数値化している部分が達成できるように取り組んでまいりたい。この数値の根拠は、学校評価、いじめアンケート、学校生活アンケートの結果から令和5年、6年の数値を参考に平均化して考えたものと、昨年度高まった数値の維持を目標に考えたものだ。昨年度と変更した箇所が1箇所ある。「ア」～「オ」の中の「ウ」のいじめの部分の達成指標で、「学校が楽しいと答えた生徒の割合」というところだ。昨年度までは、「友達と仲良く勉強していると答えた生徒」としていたが、今年度から、「学校が楽しいと答えた生徒の割合」と変えている。これについては、学校に通うことを主体的に捉え、意欲を高めていくということが大切であるとの考えから文言を変えたものだ。この数字については、今年文言を変えたことから、過去の平均値ではなく、昨年度の実績の数値をベースとし、87%以上とした。大きく変わった点はこの1箇所のみだ。達成指標についての説明は以上である。

イ 令和7年度地域連携について

校長：

本校の学校運営協議会がスタートして3年目に入っている。これまで、地域に開かれた学校作りを目指し、初年度から2年をかけて、本校の地域の捉え方、関係する地域での学習の取り組み方などをお伝えして、様々なご提言やご意見などを頂戴して進めてきた。この資料は、これまでの取り組みを確認するような意味合いでまとめたものである。今年度の地域連携に関わる取り組みに繋げていきたい。

令和5年度、学校運営協議会が発足した。令和5年度は、学校としての「地域連携の捉え方」について共通理解を図ろうと考え、「特別支援学校のもつ特殊性を踏まえ、地域を3つの枠組みで捉える視点」を提案した。この3つの枠組みを図にしたものが「身近な地域＝ローカルコミュニティ」、「広域な地域＝エリアコミュニティ」、そして「社会的な地域＝ソーシャルコミュニティ」で、この3つの枠組みで構成されていることを共通理解としていこうと提案した。こ

の「特別支援学校のもつ特殊性」については、地元の子どもたちが通う小学校、中学校とは違って、例えば盛岡南エリア全般から、紫波・矢巾までの広域な範囲、その他様々な地域から通学している学校であることから、小学校、中学校、あるいは高等学校で考える「地域」とは違った捉え方になるのではないかということに基づくものである。令和5年度は、地域の3つの枠組みを確認した年ということになる。

令和6年2月の運営委員会（年度末反省）で、「《復興教育》生活する力を高める地域学習の推進～3学部の連携の中で～」と題して、校内で資料提案をした。この中で、社会に開かれた教育課程の実現に関連し、岩手で推進する復興教育の考えを土台として、本校としては「復興教育をこのように考えるのだ」というような本校としての捉えをまとめて示した。資料の枠で囲んだ箇所に、本校として「いきる」、「かかわる」、「そなえる」をどのように捉えるのかを共通確認したところだ。この中で、同じ屋根の下にある3学部が連携した教育が展開されていくことの大切さを確認した。「かかわる」という部分については、地域連携と大きく関わるところになるので、「かかわる」というキーワードを元に、それぞれ、小学部、中学部、高等部のねらいを提示し、段階的に学習活動が展開されることへの方向性を示した。この小・中・高の「かかわる」についてのねらいについては、資料中にも示してある。小学部については、「地域を知る」ということをねらいとして、経験を拡大する学習を通して、興味関心に変えていく力を高めていきたいと考えた。中学部については、「地域と繋がる」をねらいとして、発展性のある学習を通して、変化に対して、興味・関心をもって対応する力を高めたいと考えた。高等部については、「地域に貢献する」。これまでの経験を応用して、自分たちの力でできることを広める学習を通して自己肯定感を高めることにつなげていきたいと考えた。

このように各学部のねらいを示して、令和5年度が終わるところに来たのだが、年度末反省を経て、この地域連携をもっと進めていくためには、やはり学校として校内での組織化のようなことをもっと進めていきたいと考えた。さらに教職員の共通理解を深めていかなければならない。ではどのように進めていくのかと考えたところ、本校の中に復興教育委員会という既存の委員会組織があったことから、これを起点に委員会の中で色々なものを立ち上げながら進めていこうという方向性を確認し、令和5年度は終了した。

令和6年度は、復興教育を岩手版キャリア教育という視点で捉えて、この復興教育のキーワード、「いきる」、「かかわる」、「そなえる」をそれぞれ学校教育の中で形作っていく方向性を確認し、「復興教育全体計画」を作成して提示した。今日お渡ししたA3判の資料が令和7年度版で最新版となる。昨年度作成したのは、前回（令和6年度第3回）の学校運営協議会の際に提示している。

最新版の説明は後ほど詳しくする。資料の中の「かかわる」というところを具体化するために、各学部の地域連携のねらいや取り組み事例などをまとめて載せ、学部連携と段階的な学習の流れを示した。A4判資料に一部載せたものは令和6年度に提案したもので、地域連携の全体結果を示したものだ。

では具体的に各学部の勉強というのはどう展開されてるのかというところは、なかなか見えない部分があったので、「身近な地域」、「広域な地域」、「社会的な地域」とし、それぞれの学部で取り組んでる学習がどの地域に関わっているのかというのを見てみようということで、一覧にして提示した。前期、後期の取り組み状況をまとめて、CSで発表した。資料中に写真が載せてあるが、11月2日の「ひがしの日」（他校で言う文化祭、学習発表会のような行事日）に、各学部の地域連携に関わる学習についてまとめ掲示をし、皆様に本校の地域連携の学習の流れを見ていただけるように視覚化したものだ。現在も掲示物は貼ってあるので、お時間があればお帰りの際はスロープを下っていただき、途中の掲示をご覧になっていただきたい。

ここまでの流れを経て、CSで確認をしながら、では来年度（新年度）、令和7年度はどういった活動ができるのだろうかということを、令和6年度末の復興教育委員会の中で反省をした。資料に2つ挙げている。1つ目は、学校組織として地域の枠組みをどのように捉えていくかという点の認識が深まったのはとてもよかった。もう1つは、生活に関わる力の育成に向けて、発展的に学習を進めるということへの雰囲気が高まったことは良かったというもの。具体的には、この学習が何に繋がっていくのか、何につなげていきたいのかということを考えようという雰囲気の高まりである。ただ一方で、各学部においては計画的に進めてはいるのだが、それぞれの学部の連携を意識した活動への発展がまだ弱いのではないかと。学部連携というところがまだ弱いのではないかと、まだ学部のみで終わっている感じがあるのではないかとという反省がなされた。学校の中で学部連携に取り組む際のパワーが、学校としての地域へのアピールに繋がってくるはずなのだが、そこがまだ弱いのではないかと。学校として発信していくパワーがまだ弱いのではないかとという話になった。

では、令和7年度はどうしたらよいかという方向性だが、新年度に向けては、「ローカルコミュニティ＝身近な地域」である新山地区や手代森地区での学習活動を通して、学部連携、系統性のある学習活動をもう少し高めることはできないだろうかという話になり、令和7年度にいよいよ何ができるだろうと考えたところ、これまでの学習活動を振り返り、「学部連携」と「系統性のある学習活動」をキーワードとして、学校としてプロジェクト名をつけてプロジェクト化し、具体的な活動で1年間積み重ねることはできないのかなという結論となった。これまでは、それぞれの学部がまずは子どもの実態に応じて取り組ん

でいたというところだが、今後は、いわゆる「点」と「点」を連携という意味で繋いで「線」としていこうと。線と線が交わっていく中で、線と線が作り出す形を、学校としての形作りということで展開していこうと考えた。

プロジェクト名は、「花咲く丘プロジェクト 2025」と銘打ち取り組むこととした。このプロジェクト名については、様々考え、色々な意見が出てくる中で、校歌の中に「りんごの花咲く丘にたち」という歌詞があることからヒントを得て、これまで展開されてきた色々な学習活動から、地域性のある題材を取り上げて取り組む学習活動、それから学部間連携を基に地域の中で活動する取り組みと、この2本の柱で構成して展開していこうという方向性が出され、今回の提案になった。「花咲く丘プロジェクト 2025」の具体については、この後、総括教務主任から説明する。

総括教務主任：

引き続き令和7年度復興教育推進計画について、地域連携について説明する。「地域連携＝復興教育の一部」という押さえを大事にしたい。資料に沿って説明する。「いきる」、「かかわる」、「そなえる」と書いてあるところは、校長が話した通りの岩手の復興教育の教育的価値という3つの価値観があるが、それに沿ったものだ。

まず、「いきる」は、本校のキャリア教育の視点ということで、各学部、小学部、中学部、高等部、それぞれが、学校生活や教科と関連させて、このような目指す姿や目標をもって、キャリア教育の視点で取り組んでいきたいと思いますという部分が記載されている。

「かかわる」の部分は「地域連携」に関わる部分のためこの後に説明する。

「そなえる」の部分は、防災学習とか、防災体験（避難訓練や災害時の対応など）についての学習ということになる。

資料の表、「推進にかかわるねらいと主な内容」の項目は、復興教育の価値観3つに分かれている。今回は、その中の「かかわる」について説明をする。

昨年度までの資料との変更点は、「地域を知る」、「地域と繋がる」、「地域に貢献する」という項目を学部ごとに区切っていたが、今回は区切りを点線に変更し、小・中・高の境を右上がりの斜線に変え、「段階的に」がイメージできるようにした。まず「地域を知る」という土台があって、「繋がる」、「貢献する」と段階的に移行していくイメージである。小・中・高の境目をはっきりさせず、次の段階にフェードインしていくようなイメージである。

「花咲く丘プロジェクト 2025」の今年度の活動について説明する。

まず活動のコンセプトは、「学部間の連携を意識した取り組み」が1点。もう1点は、新規の活動を立ち上げるのではなく、これまでの取り組みを「学部連

携という視点で発展させていきたい」ということだ。この2つを踏まえてプロジェクト化ということで、まずは1年単位で取り組み、それを毎年つなげていこうというのが3つの活動（「地域を知る」「地域と繋がる」「地域に貢献する」）のコンセプトである。

次に、「プロジェクト1」について説明する。これは全学部共通のもので、「地域を知る」の活動について、3学部が色々な活動を始めるときのテーマとして考えたものだ。一番多かった意見が、「りんご」だったので、「りんご」をキーワードにテーマとして考えたものだ。小学部の「りんごの木を作ろう」、中学部の「りんごについて調べよう」、高等部の「りんごでコラボしよう」の3つである。テーマを考えるにあたっては、3学部がそれぞれの学習内容に合わせて活動できることを考え、テーマに沿ってやっていきたいと思いますということになった。

小学部の「りんごの木を作ろう」は、作品作りを通して、りんごに迫るというものだ。小学校でいう「図工」の時間や、生活単元学習の時間の中で活動していくもの。

中学部は、「りんごについて調べよう」。総合的な学習の時間や生活単元学習の中で、例えばりんご育ち方とか、種類とか、様々調べましようというもの。

高等部は「りんごでコラボしよう」がテーマ。りんごを活用したコラボレーションということで、りんごのパンを作ったり、ジャムを作ったり、行事などの際のりんご販売などをしながら地域への貢献について深めていくもの。これは総合的な探究の時間や作業学習の中で取り組んでいこうということになった。りんごをテーマにした学習活動ということが、「プロジェクト1」となる。

そして、「プロジェクト2」の方は、「地域と繋がる」、「地域に貢献する」という活動になる。中学部のりんごについて調べる学習や、高等部のパンの製造などという活動はこれまでもしている活動であるので、「繋がる」「貢献する」のコンセプトを基にさらに学習内容を高めていきたいと思いますということがまずはベースにある。

「プロジェクト2」は清掃活動と、「ひがしの日に向けて」の2つある。今まで各学部それぞれ実施していた活動だが、それを学部のつながりを意識した中で実施しようというものだ。

清掃活動については、中学部、高等部でそれぞれ実施していた清掃活動に、小学部を巻き込んでやってみようというもの。「ひがしの日に向けて」は、「ひがしの日がありますよ」というチラシやポスターを配付するなどの宣伝活動は中学部や高等部ではそれぞれしていた活動であるが、そこに小学部も巻き込みましようということにし、3学部全体の縦の流れを大事にしながら取り組むという形をイメージしている。小学部は、児童の実態が様々であることに加え、

人数がとても多いことなどを考慮し、小学部全体ではなく、例えば高学年を対象にして中学部や高等部と一緒に活動してみる機会を設定してみようとするものだ。これらの活動は年間指導計画という1年間どういう学習をするのかという計画を4月に立てるのだが、その計画にしっかり盛り込みましょうということにしている。

これらの活動を行い、「ひがしの日」という本校の文化祭のような行事の日に成果を掲示して、お客様に「こういう活動をしましたよ」とお示しする方向で進めていきたい。「ひがしの日」に活動の様子を掲示するが、第2回、第3回のCSの場でも報告をしていきたい。

質疑・応答・意見

G委員：

学校経営計画の中に「特別支援教育のセンター的機能～」とあるが、何か大きく変わるような変化はあったか。

校長：

大きな変化や新規のものはないが、例えば各小・中・高等学校の支援や、様々な福祉関係との連携は強化していきたいということが土台となっている。他には色々新規の相談もあるので、それに対して丁寧に答えていきたい。今までの機能を維持していこうというところで考えている。

G委員：

生徒数も増えて、ますますセンター的機能の役割が大事なのだろう感じた。先ほど、生徒数が10名ほど増えたという話があったが。

校長：

様々なところからの相談というところでは、幼児関係についてでは、保育所など就学前の施設からの相談が増えていると思う。そういう意味では、研修会を開いて、色々呼びかけて、子どもの見方とか、障がいの理解とか、障がいの見立てという部分についての色々な知識などを広めていこうという取り組みもしているところではある。

G委員：

在校生だけではなく、それ以外のセンター的機能も担うとなると、教職員の皆様の仕事に負担にはなるのかなと感じた。

副校長：

市町村の小、中学校にも、中核コーディネーターとしてその地域の特別支援教育に関わって、相談窓口になる役職の方も配置された。ちょうど今週、そういった方々への研修を、今年度、来年度、本校が担当校として研修を行うことになったので、全てが特別支援学校でということではなく、地域の小、中学校でも相談窓口になりながら、特別支援センター的機能というのが、県立学校と義務教育の中で広がっていくような流れに今なっていると思っている。

G委員：

盛岡ひがし支援学校は、小・中・高と各学部お持ちということで、センター的機能というのがとても大事なのだと感じた。

A委員：

校長先生が学校経営計画の中で、子どもたちの基本的人権の尊重ということをだいぶ強調していたが、では具体的にそのための取り組みをどう進めていくか。岩手モデルを教職員の間で共有するとか、色々なことがあると思うが、例えば、何か具体的に研修会を今年度何回開催するとか、その研修会の内容はこういうことを扱うとか、今のところで計画があると思うが、どう進める計画になっているか。

校長：

昨年度から「岩手モデル」が始まり、不適切な指導の根絶ということの一つの大きな柱にして取り組んできている。今年度は、まだ県からの通知等も確認できてないところだが、一つは不適切な指導の根絶に向けて、教職員一人一人が、自分の言葉で、自分の考えを形にするということで、宣言書を作成して提出するというところだ。5月に入ってから作成について連絡し、現在回収しているところだ。集めた後は内容を確認し、先生方がどういう意識を持ちながら日々指導にあたっているのかを確認するというのを基本としている。私も、所属長として、コンプライアンス宣言を作成し、不適切な指導根絶に向けた姿勢を形にした。先生方にも、今ネット配信し、みんなで共通理解をするということを進めている。

それから、昨年度からの流れで、今年度も計画する予定ではあるが、不適切な指導根絶に向けた先生方との研修会ということで、「岩手モデル」の作成に至る経緯から、どういったことを大事にしていかなければならないのかということ、全体の中で共通理解をしていく研修を、今年度も昨年度と同じように設

けていきたいと思っている。

他にはコンプライアンス研修ということで、職員全体で年に1回、「岩手モデル」の研修とはまた別に、研修の機会を設けているということで、年間を通してみると、不適切な指導の根絶について意識できる機会や場はかなり設けているので、今年もまた引き続き取り組んでいきたいと思っている。

ウ 令和7年度学校運営協議会の開催の仕方について
資料のとおり承認

(6) 報告

ア 令和6年度特別支援教育センター業務状況について
資料のとおり

イ 令和7年度年間行事予定について
資料のとおり

(7) 各委員から

A委員：

先ほどお伺いした子どもたちの基本的人権を尊重することについて、学校で子どもたちの人権を尊重するということに具体的にどういうことなのか。私が関連するかなと思ったのが、先ほど学校評価の指標のくだりで、「学校が楽しいと答えた生徒の割合」というのを挙げていたが、子どもたちが「学校が楽しい」というのは、具体的にどういうことなのだろう。難しい問題だが、どうしたら子どもたちが「学校が楽しい」と感じるのだろうというのは、結構大事なのかなと思った。例えば、「花咲く丘プロジェクト2025」のところでも「プロジェクト1」、「プロジェクト2」と、段階的な学びの積み重ねということで、「地域を知る」、「地域と繋がる」、「地域に貢献する」ということで、様々考えていただいているが、こういうものがいかに具体化していくかというか、子ども自身の学びとか学校生活とどう繋がっていくかというところではないか。

例えば知的障がい教育で昔から大事だと言われてるのが、子どもたちの生活の流れに則して、生活の中で様々なことを学び、経験して力をつけていくということが言われてるわけで、子どもたちが学校生活の中で、自分がこういうことができるようになったとか、こういう力がついたというようなことを実感できるような学校生活が、「子どもたちが学校を楽しんでいる」ところに繋がるのではないかと考えた。

知的障がい教育の中で、これも昔からよく言われているが、「今日の生活に満足

して明日の生活に期待できる」という言葉がある。これは千葉養、今の千葉大学教育学部附属特別支援学校で、「生活中心教育」ということで、大変力を入れた実践をした時に言われた言葉だが、今日学校で色々なことを学んだり、経験したりして、「今日自分はこんなことができた」という満足感を持ち、では「明日は何ができるのだろう」という期待感が持てるような学校生活を先生方がどう作っていくかを考えて実践すれば、最終的には基本的人権の尊重ということも絶対についてくるはずなので、これからこれらの具体化を図っていただきたいなと感じた。

キャリア教育の視点でということもあったが、固い話をすると、例えば、人間のいわゆる欲求について、「マズローの欲求階層説」というのがあるが、いわゆる生理的欲求の充足、要するにお腹が減った時にご飯が食べられるとか、喉乾いたら水が飲めるとか、そこから始まって、最終的には「承認欲求＝人から認められる」ということが大事だということで、特に私は、「花咲く丘プロジェクト2025」の「地域に貢献する」に関わった高等部の実践例のところで、「他人の喜びを自分の喜びとして共感する」という言葉があって、これはよいなと思った。自分がやったことで人と共感したり認めてもらったりする。自分が他の人の役に立つとか地域とか社会に役に立つというのが、最終的には自己実現とか自己肯定感を高めるとか自尊感情に繋がっていくと考えているので、今年からこのような形でプロジェクトを始めていただいて、具体的な取り組みはこれからどんどん膨らみ、始まっていくと思う。ぜひ、色々なことを考えて取り組んでいただきたい。

B委員：

本日は、学校運営等に関わることを丁寧に説明していただき、本当にありがとうございます。

先日、入学式に初めて参加したが、保護者や地域の期待を一身に背負っている学校なのだなと肌で感じた。私は中学校に勤めている。生徒数はどんどん減っているが、支援が必要だったり、困り感をもっている生徒だったりとは年々増えていくということを実感している。校内だけでは抱えきれない問題がたくさんあり、支援学校の専門的なスキル等を頂戴しながら、連携しながら、今後の公立学校の学校経営や支援をしていかなければならないと感じていた。今日は大変勉強になった面がたくさんあった。

昨年度の反省を今年度の経営に生かしているという点が素晴らしいなと思った。特に「花咲く丘プロジェクト2025」については、これまでの取り組みを3学部で連携させ、そして発展させるという姿勢はやはり大事だなと思った。

中学校も学年シフトになってしまう。学部の境目の繋ぎのところを点線に変えた点は、資料中の図だと本当にちょっとしたところかもしれないが、こういう視点は大事ではないかと私自身も強く感じた。「連携する」とか「繋がる」は、これ

からのキーワードであるし、どこの校種でも大切な部分ではないかなと思ったので、私もここの部分を生かしていきたいなと思った。ぜひ、このプロジェクトが本当に花咲くように進んでいくことを期待している。本当にありがとうございました。

C委員：

ありがとうございます。本日は、これまでの取り組み状況について説明をいただき、こういう目的で取り組みをしていたのだなということを改めて感じた。本当にありがとうございました。

私の施設は、30名弱が支援学校にお世話になっている。放課後等デイサービスの方にも20名弱の児童生徒が登録して利用している。学校で行われたことについて「学校でこんなことしてきたよ」という会話がある。それをもって他学年の子たちは、自分も来年はこんなことするのだなというように緩やかに繋がってるのは体感していたが、今年度、先生方の方もそこを意識化して、プロジェクトを進めるということで、さらに有機的に取り組みが進むのだなと感じ、とてもうれしく思ったところだ。

また、昨年度は高等部の農耕班の実習で、建物の窓拭きに来ていただいた。その中で、「児童生徒の方の施設」だけではなく、「成人の方の施設」の職員との自然な交流や挨拶ができたということで、「放デイ」の方に通ってる生徒も、「成人の方の施設」の職員と交流できたよとか、褒めてもらったよなどという言葉があった。「児童生徒の方の施設」に入所している生徒も、普段関わることのない「成人の方の施設」の職員と交流ができたりするなど、自然な交流が深まっている。なおかつ児童生徒の自己肯定感の高まりに繋がるとよいねということを職員みんなで話していたのだが、これに関して、学校ではこんな方向性で進んでいたことだったのだなということを、今回は改めて確認することができて嬉しく思っている。

日常的な場面では、一つ一つ先生方が行なっていることが、生活の場でできるようにということで、日々の引継ぎ等で教えていただいている内容で何かしら取り組んでいくことできるかなと思う。毎日の引継ぎ等のところで情報共有を丁寧にいただいているところ、今後も引き続きお時間をいただくかと思うが、どうぞよろしくお願いいたします。隣接しているので、よろしくお願いいたします。

E委員：

令和7年度の盛岡ひがし支援学校復興教育推進計画が素晴らしいと思う。実は自分の会社には4人の知的障がいをもった社員がいる。ある子が何社か見て回って最後にうちに来たい（就職したい）ということで、どうしてかと話を聞いた

ところ、昼ご飯にラーメンが食べられるからだ。こういうことが楽しみなのだなと思った。これがうちの武器だったのかなと思った。こういうことで本当に楽しいと思えることが職場の中にある。

うちはA型・B型の事業所も会社とは別にやっている。開所から4年目になる。最初の2年は2～3人だったが、今はお陰様で28人いる。その中で、同時に入所してきても、大人で仕事ができる子には私の方で面接して、「君はこれからこの子を教えなさい。君はこの人の担当ですよ。」と話している。会社の方では、障がいを持った社員が入ってくると、最初は前からいる社員が先生をやる。先輩をやる。「組み立てはこうだ、何がこうだ。」と。ここでお聞きしたいのは、例えば、今年度の計画を見ると、小学部、中学部、高等部とそれぞれ分かれて活動しているが、清掃活動などは、各学部分かれて活動しているのか、混ざって活動しているのか。もしできれば、高等部の生徒が小学部の児童を、妹のように、弟のように、「ほうきはこうやって持つんだよ」というふうにしてみてもどうか。どうしても小学部、中学部、高等部と分かれて活動するというのではなく、一緒にする活動があってよいのではないか。うちの会社では、22歳の子が50歳の子に教えることもある。もちろんその逆もある。せっかく同じ校舎の中で、小学部、中学部、高等部と3つがあるので、たまには一緒になって、お兄さんのように、妹のように、何か活動ができて、それが勉強になればよい。特に今、ご兄弟（姉弟）が少ない子が多いので、お兄さんのように慕うパターンもよいだろうし、お姉ちゃんと思う時があってもよいだろうと思っている。このあたりを考慮して、アレンジして活動に活かしていただきたい。

F 委員：

地域の人間として自治会で何ができるのか、まずはその辺からのスタートになると思う。地域の人間にも、「ひがし支援学校ではこういったことをやってるよ。」という情報発信をするなど、協力できるところはあると考える。まず一番簡単にできるのは、散歩してる子どもたちを毎日見かけるので、地域の人間がまず挨拶をすることをしていけば、自然と交流につながると思う。

G 委員：

ひがし支援学校の児童生徒の成長過程で、3学部がそれぞれ関わり支援していることが分かった。子どもたちは学部に関係なく毎年成長していくことになるかと思うが、学部間の繋がりについては、節目ではあるが連続性もあるという視点が生徒にとっては大事で、先生方にとっても見守りに必要な事柄であると感じている。実際に、学校を卒業された生徒さんを受け入れる福祉サービス提供の事業所とすれば、さらに地域とより繋がり、経済社会に入っていけるような繋がりを

さらになんとか支援していきたいなと考えている。学校で、色々な地域で、先ほどから言われている様々なコミュニティと関わって力を付けてくれば、よりスムーズに地域生活に溶け込んでいけるのかなと思った。

うちでは、いわゆるホームを10か所ほど持っており、50人を越える利用者さんがいて、日中は活動に行ったり職場に行ったりしている。会社や事業所に行けば、決められたお仕事なので、特に難しいことはないのだが、本当に難しいのは、より自分で判断し、お休みの日をより充実したものに過ごすためにはどうしたらよいのかということだ。やはりそこは学校生活の中や様々な地域の中で色々な力をつけることで、より充実した生活に繋がっていくのかなと思うところだ。うちの施設でもお休みの日の支援となると頭が痛いことのひとつだ。それでもやはり色々な雰囲気を学び、色々な社会とまたさらに繋がるのかなということで、今の取り組んでいращやる地域連携を充実させていただくとよいのかなと感じている。

H委員：

児童生徒が一生懸命取り組まれている中で、先生方はさらに色々工夫されているのだなということは、去年からこの会に参加させていただいて感じている。小学校1年生から入ると12年間ここで過ごして、社会に出ていく礎を築いた上に、社会になんとか出ていくというステップなのだったと思った。学校を卒業すれば地域の中で生活していかなければいけないというのが現実としてある。地域の方々と連携して交流をしっかりと経験させていただいて、まず地域で生活できるようにという気持ちである。先生方も同じような気持ちで指導されてるかと思う。

行政的な話でいくと、こちらの学校からも放課後等デイサービスに生徒たちがいくと思うが、市内の放課後等デイサービスは4月現在で63事業所ある。令和3年度だと48だったのが、63まで増えてはいる。それでもなかなか足りてないという状況である。発達障がいなど、気になるお子様の数が増えている現状である。よって、なかなか1つの事業所で足りずに、2つの事業所を利用しているなどの状況になっている。事業所はかなり増えているが、まだまだ足りてないのかなというところだ。

小学校に入る前のお子様たちの乳幼児総合審査で「もりっこ健診」というのがあるが、こちらも健診までの待機の時間が長くなってきている。そこで、ピックアップされたお子様の受け皿というところでの親子教室も足りなくなっている。児童発達支援事業所の方も増えてはいるが、そちらも今は32か所あるが、それでも同じように受け切れていない。ピックアップはできているが、その後、支援や療育というところに向けてという点が課題になってる。事業所はどんどん増えているが、まだまだ充足はしてないなというところだ。

他には、進路の関係で障がい福祉課も大きく関わっている。例年、アセスメントの関係で、これから高等部の3年生や、場合によっては2年生ぐらいからアセスメントの方も入っていくと思うが、今年の10月から就労選択支援というサービスが開始される。今までの就労移行支援と同じような制度と言ってもよいが、学校の業務的な負担は変わらないのではないかなと見込んではいらる。今後、就労選択支援を使ってということになるが、現時点で手を挙げているのがまだ3事業所ぐらいしかない。今、就労移行支援事業所が、12か所ぐらいだったと思うが、そのうちの3事業所ぐらいが10月ぐらいから就労選択支援を開始しようという状況になっている。当然3事業所では全然足りない状況だ。利用するのが支援学校の生徒だけではないので、今後も増えていかなければならない状況だが、事業所が足りないので、経過措置として、それ以降の事業所も扱って今までと同じような形で対応するという期間があるようだ。ようやく、国からのマニュアルが今月頭ぐらいに出たという状況で、我々も今よく読み解いている状況になっている。支援学校だと、盛岡峰南高等支援学校が今年まとめの学校という話を聞いている。関係者間で会議の調整や意見の集約などを行っているという話を担当から今日聞いた。また情報があったらお伝えできると思う。

校長：

本日は本当に色々ありがとうございました。令和5年度、6年度と土台作りとして進めてきたところだが、7年度からいよいよ具体的な子どもたちの活動がスタートしていくのかなと思っている。本日、ここでいただいたご提言、ご意見等を十分に生かして取り組んでいきたい。子どもたちが1年を振り返った時に、学校が楽しいとか、学校が好きだと言ってくれる割合が87という数字では示しているが、確実にもう90%、95%以上いくように取り組んでいきたい。CSではその中間報告という形で活動の様子などは報告する。その時にまた様々なご意見をいただけたらと考えている。本日はどうもありがとうございました。

(8) 閉会のことば